

## ギリシアの誘惑

—— バイロンのヘレニズムについて ——\*

英米文学教室 門 田 守

### I

Lord Byronのヘレニズムには根本的な二面性が付きまとうと言えよう。その一つは当時のトルコの勢力に侵略され、打ち拉がれた状態にあるギリシアの現実の窮状に対する政治的発言の姿勢である。さらにもう一つは黄金の過去に燦然と輝く、その歴史的な重みをたたえた美を讃嘆する審美的姿勢である。これは緩やかに時間的秩序に従って変化するようである。すなわちバイロンは1809年に出発するグランド・ツアー途上の作品段階では、ギリシアを政治的空間として捉えていたのである。<sup>(1)</sup>ギリシアは荒廃した栄光の土地として想起され、それを破壊に陥れた近東での戦争の殺戮行為やその窮状に無感覚なイギリスの政策への非難が織り込まれる。この政治性は徐々に過去の楽園のイメージへと変貌するようである。現実の荒廃したギリシアの裏側に過去の、崩壊と墮落を免れた至福の土地のギリシアのイメージが重ね焼きされるのである。

このギリシアのイメージの変貌には、彼のギリシア遠征が否応なく絡んでくるはずである。その遠征は全体として見れば、もちろん彼の政治的活動である。しかしそれを政治的脈絡からのみ把握せずに、彼の詩作との連続性において考えると、彼の最後の旅は楽園復興への試みとして認識できるのではないだろうか。さらに18世紀からロマン派に至る感性の変遷においては、ギリシア讃美を標榜するロマンテック・フィルヘレニズムの流れ<sup>(2)</sup>が歴然として存在していたのである。その伝統の中にバイロン文学が位置していたのは確実である。ただし話はそれだけでは済まないようだ。この遠征前の彼の詩作や言動から推測して、彼は『黙示録』に現れる千年王国思想<sup>(3)</sup>のメシアとして自ら再臨し、ギリシアを救う衝動をもっていたと思われるのである。彼は黄金時代のギリシアのイメージを現実の世界に実現せんとしたのである。そうしてみれば、バイロンのギリシア遠征はロマン派が表出していった楽園願望<sup>(4)</sup>の変型となるのであるまいか。

バイロンは大きく分けて、グランド・ツアー(1809-11)とギリシア遠征(1823-24)の二度ギリシアを訪問している。これらの旅を基準にして彼の詩作期をグランド・ツアー途上、イギリス社交界時代、ギリシア遠征直前の三期に分け、それぞれに彼のギリシアへの政治的あるいは美学的深度を探ろうと思う。さらに前世紀とロマン派のギリシア観も検討し、バイロンのヘレニズムの特質に接近

\* "The Temptation of Greece: On Byron's Hellenism," The Department of English and American Literature, Tottori University, Mamoru Kadota

していきたい。

## II

グランド・ツアー中にギリシアを訪問して書いた*Childe Harold's Pilgrimage* II (1812)はそれを政治的空間として扱っている。この詩編は一応、トラベローグの体裁をとり、ほとんどがギリシアの叙景から成立している。しかしその叙景の仕方にはある論理が認められるようだ。それは客観的な風景や事実を積み重ねつつ、ギリシアの過去の栄光の姿を読者に認めさせた上で、その国の現実の荒廃した姿を強調して、イギリスの読者に対しギリシア擁護を訴えるというものである。つまりその語りの論理は読み手への説得のために使われているのである。

ギリシアに到着した語り手は先ず詩作法において“*ubi sunt*”と呼ばれる失われたものの探索という形式に倣い、ギリシアの偉大さを捜し始める。彼は知恵の神Athenaに“Where are thy men of might? thy grand in soul?” (II.ii.11)<sup>(5)</sup>と尋ねるが、彼の目に入るものは“a nation's sepulchre” (II.iii.21)ばかりである。廃墟の山と残骸の転がる中、語り手は彷徨してJupiterを祭る神殿の柱の下で座り込む。“nor ev'n can Fancy's eye/Restore what Time hath labour'd to deface” (II.x.87-88)と言われるように、彼は想像力によっても過去の栄光の姿を再建できはしない。この当時はギリシアはトルコの統治下であって、遺跡などは軍の駐屯地として利用される始末であった。語り手のギリシアの光輝さを発見する試みは失敗に終わるのである。

語り手がさらに視線を凝らすと、卑しげな一人の神殿荒しの姿が見えてくる。“Blush, Caledonia [the ancient name of Scotland]! such thy son could be!” (II.xi.95)とあるように、この男はスコットランドの貴族のLord Elginであり、アテネに大使として派遣され、パルテノン神殿の大理石彫刻の買収に従事していたのである。彼が本国に持ち帰ったギリシアの彫刻品はエルジン・マールと呼ばれて大いに珍重されたが、その遺物はいわば無理矢理故国から引き剥されたものに他ならなかった。語り手はそのギリシアを冒瀆する行為にも我慢がならないのであるが、またその古物の輸送に船を融通したイギリスの外交姿勢にも矛先を向ける。彼はイギリスの読者に“the free Britannia bears/The last poor plunder from a bleeding land” (II.xiii.114)と警告を発し、政策の変更を求めているのである。イギリスはナポレオン戦争中はギリシアを守っていたという事情があるわけだから、なおさら母国の態度の心ない変化は語り手には卑劣なものとして映るのである。

その後は語り手はハロルドを追う形でギリシアの自然の美の世界を訪ね歩く。その様子はいかにも勝手気儘に風景を描き、それにまつわる話を語るように見える。ところがハロルドの動きは恣意的ではあっても、その目的は一定している。それはギリシアの威容を高めることなのである。語り手はAlbaniaに至り、そこで生まれたAlexander大王の偉業を誉め讃える。アルバニアは雄々しい男たちの故郷であった。またPenelopeが夫Ulyssesを待ったIthacaの島が紹介され、AnthonyがCleopatraを得んがために戦いに敗れた場所Ambracia湾も導入される。昔Delphiと並んで予言の場所として知られたDodonaの神殿が訪ねられ、“What valley echo'd the response of Jove?” (II.liii.471)とそこがギリシア神話の世界と結び付けられる。そしてかつて300名以上のスパルタの兵士たちがペルシア軍から故国を守るために戦死したThermopylaeの峠の古事が語られた後に“Who that gallant spirit shall resume” (II.lxxiii.700)と語り手は自由のためなら命を惜しまない精神を鼓舞しようとする。<sup>(6)</sup>このように語り手はギリシアの偉大な過去を現在の風景の中に読み取り、次々と読者の前に提示するのである。このストラテジーの意図は結局のところ“Where'er we tread 'tis haunted, holy

ground” (II.lxxxviii.828)と言われる如く、ギリシアのどの土も聖なる歴史の重みを背負っているのであり、だからこそ今のまま失われてはならないのだという説得に繋がると考えられるのである。

それ故詩行中にギリシアの鼓手に戦いの合図を鳴らさせ、勇敢なるSuliot族を讃える

Tambourgi! Tambourgi! thy 'larum afar  
Gives hope to the valiant, and promise of war;  
All the sons of the mountains arise at the note,  
Chimariot, Illyrian, and dark Suliot!  
Oh! who is more brave than a dark Suliot,  
In his snowy camese and his shaggy capote?

(II.649-654)

という戦歌が不意に挿入されても、読者はギリシア独立を求める語り手の意図を容易に受け容れられるのであろう。『チャイルド・ハロルドの巡礼』(第二篇)は重ねられた叙景の末に”Fair Greece! sad relic of departed worth!/Immortal, though no more! though fallen, great!” (II.lxxiii.693-94)というフィルヘレニズムをイギリスの読者に認めさせる、構造的に政治的な語りをなしているのである。

同様にギリシアを政治的空間として捉えた作品に*The Curse of Minerva* (1831 pm.)がある。これはエルジン卿の遺跡収集行為への反論をより先鋭化した、高度に政治的な詩である。そのため作者の死後ようやく全面的に世間に知られたのである。これも一種の叙景の形態を取る。何故なら詩人は夕暮れにPeloponnesus半島のMoreaを散策して、”the hues of Heaven” (16)を写した自然の風景の中でアテネの近くのHymettus山や白い柱列や尖塔を訪ね、アテナすなわちミネルヴァを祭る神殿に至るといふ道筋を辿るのだから。やがて夜が迫るにつれて、”The past return'd, the present seem'd to cease,/And Glory knew no clime beyond her Greece” (61-62)というように、闇の世界にギリシアの過去の偉大な姿が蘇ってくる。詩人は偉大なアテナに出会うが、その姿には”but ah! how chang'd/Since o'er the Dardan field in arms she rang'd!” (75-76)というようにトロイの戦場を甲冑に身を固めて駆け巡った雄姿はない。ギリシアの彫刻家Phidiasによって表現された額の厳しさも、父ジュピターから贈られた盾AegisにはGorgon像もない。彼女は兜は窪み、槍は折れ、穂先も取れ、いかにも哀れな有様の女神である。このアテナは涙を流して、自分の神殿の変わり果てた様子を訴える。しかも彼女に従えば、神殿を荒したのはイギリス人であるという。イギリスはかつては国力と自由が兼ね備わった、女神に鍾愛された国であった。ところが現在は女神に最も忌み嫌われた国に墮落している。<sup>(7)</sup>その理由はイギリスがギリシアに卑劣な略奪者を送り込んだからである。アテナは詩人に荒された遺跡をとくと観察せよと命じ、語り始める。曰くCecrops, Pericles, Adrianといった英雄が育て上げたアテネをかつてゴート族が蹂躪した時、それには武力でアテネを倒したという正当な理由があったからその屈辱に堪え忍べたのだと。<sup>(8)</sup>ところが遺跡に名前を書き付けて買い取っていく、”the Wolf, the filthy Jackall” (114)にも匹敵するエルジン卿の卑劣なやり方には彼女は我慢がならないのである。

これに対し詩人はその略奪者はスコットランド人であり、母国イギリスには非はないと弁明する。アテナはそれならばお前の帰国後は非イギリス国民に伝えておけ、と徹頭徹尾イギリスの政治を批判し始めるのである。その基調は素朴なギリシア的民主精神<sup>(9)</sup>の吐露なのである。女神はイギリスの東方支配政策を批判し、いずれはイギリスはインド民衆の反乱に遭って、その帝国の基盤は土台から揺れるだろうと予言する。また女神はイギリス内政の不安定さの原因は1815年まで続くナポレオ

ン戦争の資金繰りのために、イギリス議会がCharles Stanhopeというラディカルな思想家の意見を容れて、The Gold Coin and Bank Note Billという法案を通したからであると言う。これはいわゆる金本位制から紙幣本位制への移行と、それに伴う大量の銀行券の発行を許す法案である。これが1811年に施行され、イギリス国内に大変なインフレーションを巻き起こすことになる。アテナの言う”Blest paper credit” (245)は銀行券であり、”each Premier” (247)はHenry Addington, William Henry Cavendish Bentinck, Spencer Percevalといった財政破綻に無力な首相たちである。イギリスの首相が次々と代わり、内政の混乱をもたらした原因は、そもそも1792年からイギリスがフランスとナポレオン戦争を始めたからであった。フランスの共和主義者が貴族の土地を収奪している時、イギリスはその動きに恐怖し、我が身を守る戦争を始めたのであった。<sup>(10)</sup>アテナはこの戦争を批判しているのである。

女神の声はバイロンの政治的姿勢の代弁である。彼はギリシアの叙景詩のパターンにのせ、ナポレオン戦争の停止を訴えていたのである。さもなければヨーロッパ中に燃え広がった戦争の火の手がイギリス本国に飛火するであろう。その場合”Now should they [pyres] burst on thy devoted coast,/Go, ask thy bosom who deserves them most” (309-10)というように、戦争の責任はイギリス自身にあるのだ。このようにギリシアは特にその廃墟を介して政治的メッセージの場となる。それは濃密な政治的空間として捉えられていたのである。

### III

バイロンは1811年に帰国し、グランド・ツアーの記憶をもとにし東方物語詩群を書く。ここでのギリシアのイメージはどう変わるであろうか。彼はロンドンの社交界でもて囃され、やがて異母姉 Augusta Leighとの醜聞に巻き込まれていく。その時にも美しいギリシアのイメージは彼を暖かく慰め続けていた。<sup>(11)</sup>ロンドン滞在期の詩群におけるギリシアのイメージは彼の詩的想像力の中で内向化と断片化の過程を辿るのである。風景は理想化され、作品の背景をなし、そこかしこでその美が讃えられる。さらにギリシアのイメージで特筆されねばならない点は、それがもはや失われたものの美や高貴さであることである。バイロンの想像性を加えられた風景は喪失されてはいるけれども、是非とも取り戻したい楽園の相貌を帯びてくる。その風景の提示は物語の主題と結び付いていると言わざるを得ない。何故なら作品自体が、どのように求めても絶対に手に入らないものの探求だからである。それはヒーローによる恋人との愛の達成である。恋愛の成就の不可能性は楽園復興のそれと平行的に捉えられる構造になっているのである。

例えば *Giaour* (1813)の舞台はあまりに美しいギリシアの浜辺である。バイロンは慈しむようにその楽園のごとき地勢を描く。

These mildly dimpling-Ocean's cheek  
Reflects the tints of many a peak  
Caught by the laughing tides that lave  
These Edens of the eastern wave (12-15)

擬人化を加えられた海は山々を写し、うっとりさせる風はクリスタルの海面を割り、香ぐわしき花の香りを辺りに撒き散らす。ここは極めて心地良き楽園に比するべき土地であり、*locus amoenus*の一変型と呼んでよかろう。ギリシアはバイロンの想像力によってその美を倍加される。それは自然の女神が”As if for Gods, a dwelling Place” (47)として造った、楽園の魅力と優美さを混在させ

た土地なのである。しかしそれは同時に本当に脆い場所、ほんの一触れで墮落してしまいかねない危険性を秘めたトポスなのである。

しかもそれは既に死んだものの美しさを伝える。”’Tis Greece—but living Greece no more!/So coldly sweet, so deadly fair,/We start—for soul is wanting there” (90-93)というように、その美は死によってこそ明示される。それは生気を欠いた、凍れる美である。しかもその生命の灯火は”perchance of heavenly birth” (101)と呼ばれている。そこにはかつて天上の雰囲気か漂っていたのである。そこは”Freedom’s home or Glory’s grave—/Shrine of the mighty!” (105-6)であって、偉大さの残骸しかとどめていない。ギリシアは畢竟、美しき ruins of Paradiseとして捉えられているのである。

陰鬱な過去を抱えた典型的なパイロニック・ヒーローのジャウアは楽園の探求者と言えよう。彼は修道院長にHassanを殺害した罪を懺悔する時、”’tis written on my brow!/There read of Cain the curse and crime” (1057-58)と叫ぶ。これは彼が罪を犯したが故に、もはや楽園に入る権利を剝奪されたことを表わしているのである。<sup>(12)</sup>ジャウアにとって楽園への参入はLeilaとの愛の成就であった。”Love indeed is light from heaven” (1131)や”Heaven itself descends in love” (1136)と詠われるように、愛の達成は天が地上に実現することとして表現される。<sup>(13)</sup>それはバイロンにとっては楽園の廃墟たるギリシアに想像力によって再び天を降下させる試みなのである。セクシュアリティは楽園達成のよすがとして利用されているのである。<sup>(14)</sup>

*The Corsair* (1814)にも同じことがあてはまる。エーゲ海の高き海賊Conradの愛人Medraの塔は楽園を思わせる場所に立つ。<sup>(15)</sup>その塔の回りには花々が咲き、泉からは生命を育む水が溢れている。険しい断崖上の塔は高き聖所の天と地を繋ぐエデン的地勢にあるのである。ここにコンラッドはメドラと小さな、愛の楽園を築こうとする。さらにギリシアそのものが楽園と言ってもよい。夕日が沈む時、ギリシアの島の湾は”the hues of heaven” (iii.16)を写し、エーゲ海は”long array of sapphire and of gold” (iii.52)を輝かせる。さらに女性とのセクシュアリティの実現が楽園の獲得と二重化されるのも『ジャウア』と共通である。コンラッドがSeydの軍の捕虜となる時、恋人と切り離されてしまうことは”more than doubtful paradise—thy heaven/Of earthly hope—thy loved one from thee riven” (vi.238-39)と天からの追放の比喩を使って語られる。楽園追放のイメージはセイドを殺したGulnareの様子からもわかる。彼女の額の血痕は”slight but certain pledge of crime” (ix.417)であり、楽園を追われたCainの額の焼印に相当するからである。セイド殺害は比喩のレベルでAbel殺しと等価である。ガルネアを介してコンラッドは楽園を追われる罪を受ける。それ故、罪人コンラッドは自らの楽園たるメドラと一体化できない。生還した海賊は死んだメドラと会うが、彼女は『ジャウア』におけるギリシアと同様死んだものの美を示す。”In life she was so still and fair,/That death with gentler aspect withered there” (xx.603-4)のように、彼女は死んではいるがあまりにも美しいものとして描かれている。コンラッドは死んだもの、つまり既に喪失され、形骸化した楽園しか手に入れられなかったのである。だから彼は彼女と住むはずのトポスとしての楽園であるギリシアも後にしなければならなかったのである。ギリシアはこの二作品においてセクシュアリティの実現の後に獲得される楽園として描かれていたのである。

#### IV

バイロンがギリシア遠征に出発する前のギリシア・イメージはさらにせつなく楽園の面影を帯び

る。*Don Juan* II, III, IV (1819-21)はその大半を費やして、愛の樂園としてのギリシアを描く。これは彼がVeniceから最後の愛人Teresa Guiccioliを追ってRavennaへと赴いた時期に書かれている。この頃は彼の生涯でも最も生活が乱れた時期に当り、ラヴェンナでも18歳の若妻テレサの夫カウント・グッチオーリとのいさかいなど心労が耐えなかった。そうした時でもギリシアのイメージはバイロンの心をなごませていた。その美は切々と『ドン・ジュアン』の中で詠われている。しかもそれは二つの地獄の間に挟まれて登場している。それらはジュアンがスペインから乗った船が難破して、漂流中に味う飢餓地獄とトルコの奴隷市場でサルターナの性の玩具として売買されることである。難破と人身売買の間でジュアンが楽しむことができたのが、ギリシアの樂園であったのである。

ジュアンはギリシアのCyclades諸島のある小島に漂着する。その島で彼は海賊の娘Haidéeに介抱され回復する。ジュアンはハイデとの激しいが無垢な恋を体験する。その場はいかにも樂園に相応しい、未だに汚されていない自然の景観である。恋人たちの感情は"one sigh" (II.clxxxix.6)<sup>(16)</sup>で伝わり、彼らの恋は自然な、原初の状態への回帰である。しかも彼らは恋人としての誓いも立てず、結婚もしない。さらにハイデは"all which pure ignorance allows" (II.cxc.5)であり、裏切りも貞節も知らない、一貫して自然の子として形容される。そしてギリシアは彼らの恋の達成の場としての樂園となるのである。ギリシアの島々は"Eternal summer gilds them yet,/But all, except their sun, is set" (III.i.5-6)とあるように、永遠の夏の光が燦々と降り注ぐが、それ以外の光輝は失われた樂園の廃墟としての姿を晒すのである。

ジュアンとハイデは恋の達成において、天上の性質を奪還しようとするのである。"like the climes that know nor snow nor hail/They were all summer" (IV.ix.4-5)あるいは"they had too little clay" (IV.ix.8)とあるように、彼らは肉としての性格を縮小され、同時に霊としての側面を強調されて、"another Eden" (IV.x.2)の再興を試みる。彼らのセクシュアリティにおける霊的側面は、ハイデの美の表現の中において"it seemed full of soul;/She had so much, earth could not claim the whole" (IV.lx.6-8)であることにも窺われる。彼女に対する恋情は原初的樂園への憧憬と等価なのである。

だがこの二人の恋はハイデの父親Lambroによって阻止され、彼女は彼のピストルに撃たれジュアンの子を孕んだまま死んでいく。ランプローは革命に際しトルコ海軍に立ち向かう反逆的なギリシア人海賊魂を具現化した男であった。<sup>(17)</sup>ジュアンは縛り上げられ船に乗せられ、奴隷市場でサルターナの執事Babaに買い取られる。樂園は再び喪失されたのであり、"That isle is now all desolate and bare,/Its dwellings down, its tenants past away" (IV.lxxii.1-2)のように、ギリシアの島はまた樂園の残骸を提示する。ギリシアはいつも既に失われている樂園としてしか現われないのである。<sup>(18)</sup>

## V

このようにギリシアを政治空間または樂園として捉える様式は、実は18世紀の感性からの連続である。<sup>(19)</sup>バイロンのギリシア観が特に新奇なわけではないのである。前世紀の詩人で批評家のJoseph Wartonは"Ode to Liberty" (1746)という作品の中で、自由の女神にギリシア・ローマの自由や勇敢さを讃えさせながら、

Britannia watch!—remember peerless Rome,  
Her high-tower'd head dash'd meanly to the ground;  
Remember, freedom's guardian, Grecia's doom,

## Whom weeping the despotic Turk has bound

(61-64)<sup>(20)</sup>

と綴る。彼はイギリスにギリシアのように自由を踏みにじられないよう注意を促したかったのである。ちょうどこの頃1744年にイギリスはフランスと植民地戦争を始めており、愛国心が高揚した時代的趨勢にあったのであろう。ギリシアはイギリスが見習うべき政治的自由の手本であったことは間違いあるまい。

叙景詩人のJohn Dyerは*The Ruins of Rome* (1740)でギリシア・ローマの廃墟を描きつつ、イギリスにその残骸の教訓を伝えるという構造を示す。

Beauteous Greece,

Torn from her joys, in vain with languid arm

Half rais'd her rusty shield; nor could avail

The sword of Dacia, nor the Parthian dart;

.....

O Britons, O my countrymen, beware;

Gird, gird your hearts (456-59 & 511-12; *WEP*)

美しいギリシアの女神が在りし日の栄光を失って、うなだれている状況に対する言及などはパイロンの『ミネルヴァの呪い』を予想させる感性を示している。また古代ギリシアの誇る武具のダキアの剣やパルティア人の弓矢についての指摘もパイロンの場合と同じである。

さらにJames Thomsonの*Liberty* (1735-36)の場合も面白いことに同じ構造をもつ。ギリシアはペルシアに踏みにじられ、呻吟した状態で登場する。自由の女神はこのようにその窮境を詠う。

Thus tame submitted to the victor's yoke

Greece, once the gay, the turbulent, the bold;

For every Grace, and Muse, and Science born;

With arts of war, of government, elate;

To tyrants dreadful, dreadful to the best;

Whom I myself could scarcely rule: and thus

The Persian fetters, that intrall'd the mind,

Were turn'd to formal and apparent chains.

(ii: 482-89; *WEP*)

しかし彼の場合はより楽観的であり、たとえギリシアは蹂躪される浮き目に遭っても、イギリスは自由を享受し続けるであろうと詠う。このナショナリズムの登場は、当時の植民地を伸長する戦争の勃発に際しての国威発揚の意味があったのであろう。

Oh, blest Britannia! in thy presence blest,

Thou guardian of mankind! whence spring, alone

All human grandeur, happiness, and fame:

For toil, by thee protected, feels no pain;

The poor man's lot with milk and honey flows;

And, gilded with thy rays, ev'n death looks gay.

(v: 2-7; *WEP*)

これらはイギリスにとってギリシアが自国の状態を知るための政治的鏡の役割を果たしていること

示している。だからこそそこから警告や讃美など違った対応が発生してもおかしくないのである。

18世紀イギリスにはギリシアを楽園と見る視点も備わっていた。例えばギリシア学者のThomas BlackwellはHomer時代のギリシアの生活を徹頭徹尾ナチュラルなものとして描いている。彼の*An Enquiry into the Life and Writings of Homer* (1735)はその事情をこのように伝えている。

They are obliged to no exhausting Labour, to stiffen their Bodies and depress their Mind. Their Life is the likeliest to the plentiful State of the *Golden Age*; without Care or Ambition, full of Variety and Change, and constantly giving or receiving the most natural and elegant Pleasures ... (74)<sup>(21)</sup>

これは、黄金時代への郷愁の籠ったギリシア観の披瀝と言うに尽きるであろう。

またこの時代のヘレニズムの特徴は、実際にギリシアに旅行して、そのイメージ通りの美しさを本国に伝えるという形式が発生してきたことである。古美術収集家で、かつ旅行家のRichard Chandlerは*Travels in Asia Minor* (1775)において、

The beauty of the evening in this country surpasses all description. The sky glowed with the rich tints of the setting sun, which now, skirting the western horizon, raised as it were up to our view the distant summits of the European mountains. (159; *ERH*)

と述べ、ギリシアの汚されていない美を讃えている。ギリシアの自然の風景に対する耽溺は、バイロンの場合にも共通に見られる傾向であった。

同じく旅行家のJohn Bacon Sawrey Morrittは*Letters Descriptive of Journeys in Europe and Asia Minor in the Years 1794-1796* (1914)において、その黄金の美をこのように讃えている。

A setting sun, when we saw it, shone full on the temple; beyond, the sea was as smooth as a mirror, and the eye wandered over the neighbouring islands, or fancied distant ones. Samos, Icaria, Patmos, Leros, Calymna, and some smaller islands near us, were all scattered over it, and you can hardly conceive a more delicious scene. The moon at night, and the sun at daybreak the day after, showed it off still more, in new lights and equal beauty. (201; *ERH*)

彼はそのその無垢な美を心ゆくまで楽しんでいるようである。これらは文学上のギリシア讃美という常套主題のサブ・ジャンルをなし、後にバイロンがギリシアの美を詠った感性を用意するものなのである。

こうした中で、John Montagu, the fourth Earl of Sandwichという貴族は19歳でギリシアを訪れ、その翌年もギリシアへ渡っている。彼は様々な島を訪れ、その美を讃えたのであった。彼に付き添った人間たちにはWilliam Ponsonby, the second Earl of BessboroughやJohn Etienne Liotardという画家もいた。Montaguなどはバイロンのプロトタイプをなす人間と言って差し支えあるまい。<sup>(22)</sup>

## VI

さて、こうした美を呈しつつもトルコの支配下で呻吟しなければならないギリシアをバイロンはもとの楽園に復興したいと願わなかったであろうか。<sup>(23)</sup>遠征直前の彼の詩作品を眺めてみると、その傾向が窺われるのである。つまり黙示録的状况を伴う千年王国の要素が、この頃の彼の精神状態を

表わしているようなのである。<sup>(24)</sup>それは既存の体制を破壊し、全く新しい解放された社会秩序を産み出そうという願いである。そこにはメシアが再臨し、人々を救うという思想が流れている。たとえば、*Marino Faliero* (1821)ではヴェニス総督ファリエロは反乱軍と共に蜂起し、墮落した貴族階級と戦う。宣戦の夜明けに彼は黙示録の破壊天使たる“the destroying Angel” (IV.ii.133)が上空に舞う幻想を見る。彼はこの革命の日が“a bright millennium” (IV.ii.156)の先駆けたらんことを欲するのである。これは彼がメシアとしてヴェニスを救う意図を示す、言えるであろう。また*Sardanapalus* (1821)でもアッシリアの王サルダナペイラスは黙示録の大洪水の中、国の平和を守るために立ち上がったメシアの相貌を帯びている。彼を“a thwarted Messiah”<sup>(25)</sup>と解釈するのは正しい。バイロンは両作品でメシアを登場させているのである。

バイロンがギリシア遠征に赴くのはこの後1823年のことである。乗った船は勇ましくもHercules号と呼ばれたが、実質的には船足の遅い運搬船であった。その船は何度もトルコ艦船に拿捕され、ようやくギリシアに到着した。概ね三派に分岐した革命勢力<sup>(26)</sup>の中で、バイロンは最も血筋の正しいMavrocordato王子をMissolonghiで支援することに決定する。<sup>(27)</sup>バイロンのギリシア支援は、彼に同行した軍人のWilliam Parryが彼のギリシアへの同情を“his sentiments I cannot forget, for they made on me a deep and lasting impression” (23)<sup>(28)</sup>と語るほど、真摯なものであった。しかしかつて詩中でその勇猛さを讃美したスーリオット族は金をせびるだけの無頼漢の集団であった。バイロンは満足な軍事行動もできずに熱病に倒れ、不慣れた医師に血を抜かれながら力尽きて命を落とす。その最後は哀れであり、アンチ・クライマックスと言うのが正しいだろう。いわば、彼は挫折した救世主として死んだのである。

ところがギリシアを楽園として見る姿勢は、バイロンに限らずロマン派の時代でもいっそう発展して見られることであった。Keatsが“Ode on a Grecian Urn” (1820)で描くギリシアは“Ah, happy boughs! that cannot shed” (iii.21-24)<sup>(29)</sup>と常春の楽園であった。当然彼のギリシアは“Cold Pastoral” (v.45)であって、壺に描かれただけの、凍れる、静止した世界であった。しかも皮肉なことに、キーツが靈感を得た壺はバイロンが『チャイルド・ハロルドの巡礼』や『ミネルヴァの呪い』などの諷刺詩で非難したエルジン・マーブルの一つであった。キーツとバイロンはギリシアへの姿勢で、それぞれ消極性と積極性の両極端を描くと言えよう。しかしながら、その態度の本質は等しくギリシアを楽園として憧憬することなのであった。

より明快なのはShelleyの*Hellas* (1822)であろう。この詩自体がマヴロコルダート王子に捧げられているように、シェリーはここで大変なギリシア讃美をしている。序文に“We are all Greeks—our laws, our literature, our religion, our arts have their root in Greece”<sup>(30)</sup>とあるように、ギリシアはヨーロッパ文明の起源なのである。ギリシア反乱軍が占領軍を破る報告がトルコのサルタンMahmudに対し次々になされ、ギリシア独立がシェリー得意の予言の形で語られる。ギリシア解放は“The world’s great age begins anew./The golden years return” (1060-1061)とコーラスが歌うように黄金時代の復活である。さらにシェリーは“The Greeks expect a Saviour from the West” (598)と述べ、当時ギリシアに流布していた大衆のメシア待望の雰囲気をも明確に伝えている。<sup>(31)</sup>事実、ギリシアのメシア待望論は当時全民衆的規模で漲っており、それはAgathangelosという13世紀の予言者によって伝えられたと信じられていた。<sup>(32)</sup>ギリシアの動向に耳目を傾け続けたバイロンがこの姿勢に疎かたとは考えられ難い。彼は黙示録のメシアと自らを思いなし、遠征に赴いたのであろう。

バイロンの楽園願望はこれだけにとどまらない。遠征中彼は実はギリシアよりもアメリカに渡る計画を立てていた。同行した善意ある朋友Peter Gambaは日誌で“He likewise had some thoughts

of going to the United States of America,...I once saw him nearly on the point of departure” (2-3)<sup>(33)</sup>と記し、バイロンがこの当時、アメリカに隠棲する意図を示していたことを伝えている。<sup>(34)</sup>バイロンのギリシア遠征は、彼の楽園願望という大きな精神的フレームワークの中で起こった、一つの帰結なのであった。

18世紀からのフィルヘリンたちがギリシア・イメージを政治空間と想像的楽園として見てきたのに対し、バイロンはその両者を遠征という身ぶりでは結合させたのである。ギリシア讃美自体は1826年にはすぐに下火になってしまう。それはギリシアの負った多額の借款問題、ギリシア国内での少数派の鏝ぜりあい、ギリシア船が海賊化し近海を荒し回っていたことなどが原因であった。この時期になると民衆レベルでのギリシア支援は消え、それは政府が政治的に処理すべき問題になってしまうのである。これは社会現象としてのフィルヘレニズムの終焉であった。<sup>(35)</sup>そうしてみれば、18世紀中盤頃から社会的に盛り上がったフィルヘレニズムはロマン派時代の楽園願望や理想社会建設の機運の興隆<sup>(36)</sup>を産んだ精神現象と符合するのである。バイロンのギリシア行きはこうした趨勢の結果起こったのであり、時代が彼を聖地に赴かせたのだと考えてもよいであろう。決して、ギリシア遠征の原因をバイロンの個人的事情に還元しただけで満足してはいけないのである。

## 注

本稿は日本英文学会中部地方支部第42回大会（1990年10月6日、福井大学）での口頭発表の内容に補訂を施したものである。

- (1) グランド・ツアー時のバイロンのギリシア擁護についてはWilliam A. Borst, *Lord Byron's First Pilgrimage* (New Haven: Yale UP, 1948) 127-55参照。
- (2) この思想的背景についてはTerence Spencer, *Fair Greece Sad Relic: Literary Philhellenism from Shakespeare to Byron* (London: Weidenfeld & Nicolson, 1954); Bernard Herbert Stern, *The Rise of Romantic Hellenism in English Literature 1732-1788* (New York: Octagon Books, 1969); Alexis Dimaras, "The Other British Philhellenes" in *The Struggle for Greek Independence: Essays to Mark the 150th Anniversary of the Greek War of Independence*, ed. Richard Clogg (London: Macmillan, 1973) 200-23参照。
- (3) 千年王国論の歴史的背景及び基本的性格についてはM. Kaufmann, *Utopias; or, Schemes of Social Improvement from Sir Thomas More to Karl Marx* (1879; Folcroft, Pa.: Folcroft, 1972); H. W. Donner, *Introduction to Utopia* (London: Sidgwick & Jackson, 1945); Norman Cohn, *The Pursuit of the Millennium* (Fairlawn, N.J.: Essential Books, 1957); Ernest Lee Tuveson, *Millennium and Utopia: A Study in the Background of the Idea of Progress* (New York: Harper & Row, 1964); Joyce Oramel Hertzler, *The History of Utopian Thought* (New York: Cooper Square Publishers, 1965); Theodore Olson, *Millennialism, Utopianism, and Progress* (Toronto: U of Toronto P, 1982)等参照。
- (4) この件に関してはWarren Stevenson, *The Myth of the Golden Age in English Romantic Poetry* (Salzburg: Universität Salzburg, 1981)及びMax F. Schulz, *Paradise Preserved: Recreations of Eden in Eighteenth- and Nineteenth-Century England* (Cambridge: Cambridge UP, 1985) 41-151参照。
- (5) バイロンの詩作品の引用は特に断わりのない限りLord Byron, *The Complete Poetical Works*, ed. Jerome J. McGann, 7vols. (Oxford: Clarendon, 1980-91)に拠る。
- (6) バイロンのギリシア讃美の肝要は自由と政治的正義への渴望である。この件に関してはPaul Trueblood, "Byron's Championship of Political Freedom" *Byron Journal* 4 (1976): 22-33参照。
- (7) イギリスはギリシア支援の後進国であった。この点についてはVirginia Penn, "Philhellenism in England" *The Slavonic Review* 14 (1936): 363-71 & 647-60参照。

- (8) これはバイロンがプラトンの正義と自由を讃美しているための表現であろう。この件に関してはBernard Blackstone, "Byron & the Republic: The Platonic Background to Byron's Political Ideas" in *Byron: Poetry and Politics*, ed. Erwin A. Stürzl & James Hogg (Salzburg: Universität Salzburg, 1981) 1-41参照。
- (9) この件の詳細についてはJean-Pierre Vernant, *The Origins of Greek Thought* (Ithaca, New York: Cornell UP, 1982) 82-101参照。
- (10) 1813-14年当時バイロンは共和主義を受容する態度を示している。この件についてはMalcolm Kelsall, *Byron's Politics* (Brighton: Harvester, 1987) 34-56参照。
- (11) ロンドン時代を含めた、バイロンとギリシアの通時的関係についてはHarold Spender, *Byron and Greece* (New York: Charles Scribner's Sons, 1924) 3-26参照。
- (12) バイロニック・ヒーローと罪の意識の関係についてはSamuel C. Chew, *The Dramas of Lord Byron: A Critical Study* (1915; New York: Russell & Russell, 1964) 149-64参照。
- (13) 地上の要素と天上の要素の融合はミレニアム実現の重要な形態的特徴である。この件の詳細についてはYonina Talmon, "Pursuit of the Millennium: The Relation between Religious and Social Change" *European Journal of Sociology* 3 (1962): 125-48参照。
- (14) ロマン派がギリシアを女性的価値の実体化と見たことはDiane Long Hoeveler, *Romantic Androgyny: The Women Within* (University Park: Pennsylvania State UP, 1990) 140参照。
- (15) バイロンの島の楽園性については、拙論「内なる楽園—バイロンにおける〈島〉の地形学—」『鳥取大学教育学部研究報告(人文・社会科学篇)』第39号(1988): 167-79参照。
- (16) テキストはLord Byron, *Don Juan*, ed. T.G. Steffan & W.W. Pratt (Harmondsworth: Penguin, 1982)に拠る。
- (17) ギリシアのトルコとの革命闘争についてはSpencer 171-93参照。
- (18) ギリシアのアルカディア性の分析についてはStern 1-16参照。
- (19) 文学としてのフィルヘレニズムの18世紀からの継続相に関する議論はFrederick E. Pierce, "The Hellenic Current in English 19th Century Poetry" *JEGP* 16 (1917): 103-35と併せ、Wallace Cable Brownの次の三論文を参照。"The Popularity of English Travel Books about the Near East, 1775-1825" *PQ* 15 (1936): 70-80; "English Travel Books and Minor Poetry about the Near East, 1775-1825" *PQ* 16 (1937): 249-71; "Byron and English Interest in the Near East" *SP* 34 (1937): 55-64。
- (20) テキストは*The Works of English Poets*, ed. Alexander Chalmers, 21vols. (New York: Greenwood, 1969)に拠る。このアンソロジーは以下WEPと略記する。
- (21) テキストは*English Romantic Hellenism 1700-1824*, ed. Timothy Webb, (Manchester: Manchester UP, 1982)に拠る。このアンソロジーは以下ERHと略記する。
- (22) この件についてはSpencer 146-70参照。
- (23) ミレニアム思想における過去の純粋さの復興の相についてはYonina Talmon, "Millenarian Movements" *European Journal of Sociology* 7 (1966): 159-200参照。
- (24) バイロンにおける千年王国思想の展開については、拙論「バイロンの黙示録的崇高—千年王国思想の視点から—」『I V Y』(名古屋大学英文学会)第24号(1991): 73-89参照。
- (25) Martyn Corbett, *Byron and Tragedy* (London: Macmillan, 1988) 90。
- (26) ギリシア独立運動の勢力分析についてはHarold Nicolson, *Byron: The Last Journey, April 1823-April 1824* (London: Constable, 1924) 46-69参照。
- (27) バイロンの政治学の保守的貴族性についてはCrane Brinton, *The Political Ideas of the English Romanticists* (1926; U of Michigan P, 1966) 147-63; David V. Erdman, "Lord Byron and the Genteel Reformers" *PMLA* 56 (1941): 1065-94; R.W. Harris, *Romanticism and the Social Order 1780-1830* (London: Blanford P, 1969) 328-62; Carl Woodring, *Politics in English Romantic Poetry* (Cambridge, Mass.: Harvard UP, 1970) 148-229; Francis Bickley, "Byron & The Greek Revolutionary Press" *Byron Journal* 4 (1976): 36-41参照。
- (28) テキストはWilliam Parry, *The Last Days of Lord Byron: With His Lordship's Opinions on Various Subjects, Particularly on the State and Prospects of Greece* (London: 1825)に拠る。
- (29) テキストはJohn Keats, *The Complete Poems*, ed. John Barnard (Harmondsworth: Penguin, 1977)に拠る。

- (30) テキストはPercy Bysshe Shelley, *Shelley's Poetry and Prose*, ed. Donald H. Reiman & Sharon B. Powers (New York: Norton, 1977)に拠る。
- (31) シェリーはこれに注を付し”It is reported that this Messiah had arrived at a seaport near Lacedaemon in an American brig. The association of names and ideas is irresistibly ludicrous, but the prevalence of such a rumour strongly marks the state of popular enthusiasm in Greece”と、信憑性のある発言をしている。この点は*Shelley's Poetry and Prose*の426ページを参照。
- (32) しかしながら、その書はTheoklitos Polyeidisという18世紀半ばの男の偽作であった。このことはメシア待望論がこの時代の産物であったことを明らかにしていると思われる。この点についての事情説明はRichard Clogg, ”Aspects of the Movement for Greek Independence” in *The Struggle for Greek Independence* 1-40参照。
- (33) テキストはCount Peter Gamba, *A Narrative of Lord Byron's Last Journey to Greece* (Paris: A. & W. Galignani, 1825)に拠る。
- (34) バイロンは数人の友人たちにも、南アメリカでのプランテーション経営など同様の計画を手紙で伝えている。その内容は*The Works of Lord Byron: Letters and Journals*, ed. Rowland E. Prothero (London: John Murray, 1922) IV:360, 368, 377参照。
- (35) この件についてはPenn参照。
- (36) Fourier, Robert Owen, Saint-Simonらの理想共同体建設など楽園願望の顕在相についてはFrank E. Manuel & Fritzie P. Manuel, *Utopian Thought in the Western World* (Oxford: Basil Blackwell, 1979) 579-693参照。

(平成4年4月20日受理)